



いよよ汝を焼かねば荻の径も尽き
火遊びの果ての天井守かな
空蟬や贖罪といふ重きもの
虫の夜は川のほとりに眠るごと
鯉上げやすずめ陽気に佐久の空
天の根に浸る潮風海人祭
本心は見透かさるまじ瓜齧る
ほたえ死にの兆しひらひら秋扇
かなかなやそろそろゆるす頃合ひか
盆の月稚児エイサーの路地巡り
黒葡萄狩りつつ至る空の縁
鹿の糞寧楽の早に香のごと
ボール抜けばすぐたまたまれてキャンプ果つ
盆に食む茄子の皮の雑炊よ

*

十代の心の霧やカプチーノ
恐竜の眠る地層へ蟬の穴
身にしみて火星キラキラ竹シャンシャン
嗽薬くちびる乾く夜学かな
刈りたての草に寄るなり山の鳥
猿尾枷消したき記憶振り払ひ
あの燕また来るからと言はざりき
竹蜻蛉月の棚田へ放ちやる
コスモスの雲押しわけて佐久はるか
親不知海より揚がる蟬のこゑ
どんばすや田舟曳き摺る仕事唄
秋の鮎千曲川よりひっこ抜く
手の平を窓のむこうの虫に当て
木曽駅の落し物なる甲虫
ダリヤ咲く遠くより来し友の如
生盆や天の邪鬼こそわが心情

国見敏子
岩井かりん
古畑恒雄
矢島 惠
田中純子
渡久山和子
谷口とし子
渡辺真帆
菅原砂登子
渡嘉敷皓駄
ビュニャールしづ子
梶原夢乃
海野良三
清水美智子

島形英美子
田中優子
曦 達久
飯田六斗
田中弘泰
古畑富美江
若林敏明
村田朋美
中岡草人
幹 自聲
長谷川みきこ
那須野次則
堀内昭代
宮坂千恵
三原蛙子
百瀬石涛子

岳俳句・拓くことば 十一月

(459)

宮坂 静生

はじめに。私事で恐縮であるが、十一月四日八十歳となる。生涯でもっとも忙しいときを迎えた。小著『季語体系の背景 地貌季語探訪』（岩波書店）を上梓した。およそ三十年余をかけた仕事であるが、原点は意識して俳句作りを志した昭和三十五年（一九六〇年安保）からなので五十七年の時間が背景にある。編集者が本書紹介文を「ことばには土地の貌が映し出されている。どうしてもそのことばでなければならぬ現象、営み、情念、願い。これまでの季語の範疇を超えて、愛着のあるこの土地の、このことばでこそ、詠みたい。地貌季語への期待と展開の実践書」とまとめてくださった。名文だと秘かに感銘した。本書の帯文の柳田邦男先生からは過褒の一文を頂戴し、金子兜太先生のやさしい眼差しとともに推薦賜ったのは最高の幸せと思う。折から現代俳句協会創立七十周年記念大会一連の行事が十一月二十三日に行われる（会場帝国ホテル）。それに関連した出版物も目白押し。これを書いている十月二十日の現在、点検、詰め段階に入っているが、大方盛り上り、好調。適材適所に優秀な方々に尽力していただきありがたい。先述の自著といい、行事といい、一人の力ではない。世の中にはときとところを得ると力を出してくださる方がいるものと、感心し、感謝している。俳句作りも同じ。吟行に誘って貰う、さまざまな句会や催

ところ。子どもの火遊びではない。「無分別な恋愛や情事」『新潮現代国語辞典』を指すか。さてさてお手上げといった、追いつめられながら、一抹の余裕をもった粹人の心境ではないか。私もそんな心境になってみたいものと憧れて推奨した。大胆な作。

虫の夜は川のほとりに眠ること 矢島 恵

川辺は虫すだくところ。当然の思いであるが、一句にある透明感がふと永遠の眠りを呼び起すようで、巧みな比喩だ。

鯉上げやすすめ陽気に佐久の空 田中 純子

今月の秀句

空蟬や贖罪といふ重きもの 古畑 恒雄

作者は高名な弁護士。長い間日本の法曹界の仕事に尽くされ、「贖罪」（罪をつぐなう）の場に関わって来られた。「空蟬」はひたすら贖罪に尽くしている本人の心理状態を比喩的に指したもののか。いったん犯した罪は、消えることがない。生涯をかけたつぐないとなろう。ときには神仏と向い合い、俗を脱してはじめて、いく分でもつぐないの叶うことがあるうか。作者も句作を通し、日常の重い現実から浮遊したお気持もあろう。作句いよいよ好調と拝読している。

しに出させていただく。周りからの刺激の大切さ、自分以外のひととの出会い、一期一会、またことばとの出会い、一語一会をしつかりと自覚したいと思う。忙しいときほど俳句ができるのは、もっともなことである（小林貴子編集長ほど、できてできて困ることはないが）。

荻の径も尽きとは死別のあきらめの表現か

いよよ汝を焼かねば荻の径も尽き 国見 敏子

通夜を経て、大事な人とのぎりぎりの別れ、火葬をいったもの。荻の生える水辺への径を想定したのは、死別の追いつめられた心境を具体的な状況を描いて示したのである。作者の心理詠は屈折したいい方をするが、心情はきわめて純愛型。愛情が深いだけにあれこれと思いまどうのであろう。饒舌ともとれる心理を展開する点では「岳」一番のテクニシャン。

火遊びの果ての天井守かな 岩井かりん

天井守は唐辛子（番椒）。〈戸障子もむしろかこひの売屋敷〉（芭蕉）〈てんじやうまもりいつか色づく〉（去来）の『猿蓑』の連句の付け合いが名高い。「ことごとく上をむく故に名くとぞ」（俳諧歳時記萩草）という。「火遊び」が問題の

佐久地域では水田や池で飼われている鯉を秋に漁獲する。九月上旬、落水の前に田の中の鯉を田の水口に誘い、網で上げる。京都の広沢の池では十二月の第一金曜日を目安に行い、十二月の京の風物詩になっている。佐久では秋。その頃は丁度稲穂が垂れる時期で、雀は大量。風土色ある作。

天の根に浸る潮風海人祭 渡久山和子

宮古島在住の作者。海人祭は海神祭。旧盆の沖縄北部の行事。祝女と祝女に仕える神女が祭祀を司る。海の彼方からニライ・カナイの神を招き神を寿ぐことで豊年祈願をする。潮風を享受しながら「天の根に浸る」との宇宙を視野に入れた敬虔さがいかにも海洋民族沖縄人だと思ふ。

本心は見透かさるまじ瓜齧る 谷口とし子

主人公にはお目当ての人がいる。その細やかさを知られたくないと、胡瓜を齧るような打切棒な行為をしたのである。噂が立つことを嫌う女心のやるせなさの句には違いないが、一方で素朴さがある。どこか気持のチグハグさや思い込みを捉えているところがおもしろい。作者は飛驒高山在住。

ほたえ死にの兆しひらひら秋扇 渡辺 真帆

「ほたえる」はふざける。たわむれる意。落語家の高座の場面か。秋扇をひらひらさせながら、酔生夢死ではないが、戯れてはたり逝去する噺家の末期を演出したものか。日常の暮しの中での「ほたえ死」のイメージとすると「兆し」がは

黒幹を霧の出てくる縁かな 昭和55年

小林秀子句集『芽以』上木に際し、贈呈した句。「岳」発足時彼女は副編集長であった。「鷹」でも期待の才媛。小諸に居住し、達意の文章を書いた。九州福岡の人で、野見山朱鳥の「菜穀火」で活躍していた。私の句集『青胡桃』を朱鳥が懇切に批評してくださったのも秀子の幹旋による。彼女を思うとなぜか霧の軽井沢が目に見え、早く逝去した。句集『樹下』所収。

喧嘩千鶴すなはち名医春隣 昭和56年

「京谷圭仙信濃を去る」とある。七十余年過ごした安曇の地から昭和五十六年三月東京北小岩へ移住。「岳」で活躍した学生や若手に資金援助を惜しまない女医で、初期の本誌への貢献者。明治四十三年四月十七日東京京橋生れ。帝国女子医専卒業。夫が軍医として出征した後、戦時中、十九年八月、当時無医村の南安曇郡倭村（現松本市）へ疎開し、開業。若い頃は「喧嘩千鶴」と呼ばれたちゃちゃきであったという。鄙では仁医として慕われた。代表作「冬の虹まだあたたかきほとけにて」がある。『樹下』所収。

引鶴の径ひかりたる多賀城趾 昭和56年

「岳」（昭和五十六年六月号）所載。仙台郊外利府町の伊藤四郎に招かれ仙台から松島の「おくのほそ道」旧跡を辿った。「伊藤四郎」と前書が付く「旅の果十符の菅谷暮れかぬる」も同時作。冠川のほとり四〇〇くらいの菅谷を地元では「おくのほそ道」と称していた。興味があつた。四郎は「鷹」での私の友人で、無口であるが、辛辣な批評者。「種蒔くと翁は雲にのぼりけり」の色紙を貰い大事にしている。掲句は「壺の碑」を見た後、多賀城趾の土塁に佇む。折から春の引鶴が北へ舞う光景を仰いだ。小型の飛行機のようにきらきら光りながら過ぎる。不意に旅情を抱いた。北の多賀城、南の大宰府。政庁があった地である。『樹下』所収。

蟻地獄信濃へかへることばかり 昭和56年

「亭人を見舞ふ」とある。「夏々と夏夏々と灯の相模」「三伏や亭人とゐて草の刻」も同時の作。初期「岳」の代表的な俳人座光寺亭人は次男のもとへ身を寄せるため座間市へ移住。発病の身をお見舞いした。すると、「大町へ帰りたい」というばかり。都会のマンション暮しが地の人亭人に合わないことは判っていた。切ない句だ。『樹下』所収。

つきりしないが、むずかしい場面を巧みに、秋扇一本で勝負に出たのは巧者である。

かなかなやそろそろゆるす頃合ひか 菅原砂登子

蛸の鳴く秋になり、なにを「ゆるす頃合ひ」なのかわからない。公のことではなく、家族のことかと思われる。広く男女の仲、あるいは子との関わりなど。いずれにしても、時間の経過が一つの決着を生んだようで、それはよくあることだ。なにをかというと中味は読み手の体験に任せる一句。

盆の月稚児エイサーの路地巡り 渡嘉敷皓駄

（参考写真七五頁）

沖縄の旧七月十五日の晩から翌朝にかけて、精霊を送る盆踊がエイサー。囃子ことばからの呼称。裸足で各家を巡る「稚児エイサー」が珍しい。沖縄では世代を超えた盆行事だ。

黒葡萄狩りつつ至る空の縁 ビュニャール

外国暮らしからパリ郊外の自宅に戻られた由。ワイン作りのために黒葡萄狩りをする光景か。山上まで葡萄畑がつづく。空の縁まで至る、悠々たる大景がヨーロッパの地貌を彷彿とさせ、島国日本とは違う安らぎが感じられよう。

鹿の糞寧ろの早に香のごと 梶原 夢乃

乾いたとはいえ鹿の糞が線香の「香のごと」とは意外性あり。奈良公園など至るところにあるものか、実地体験者でないといとこんな直喩は思い付かない。大胆な着想に挑戦の新進。

ポール抜けばすぐたまたまれてキャンプ果つ 海野 良三

山口誓子ばりの情抜きの素気ないことがら詠。キャンプ場のテント終了の素早さをいい、たちまちに行楽の夏が去りゆくさみしさを描く。機能的、合理的にことが運ばれる現代の一面を描き、読み手の想像をかき立てている。

盆に食む茄子の皮の雑炊よ 清水美智子

茄子の皮は焦げ易い。その雑炊とてもとよりうまいものではない。貧しさの象徴とか。新潟甚句に「盆だてがんね茄子の皮の雑炊だ。あまりてっこ盛りで鼻のてっぺんイヨ焼いたとさ」とある由。米どころ越後の甚句やおけさに残る地貌の一端を知り、農夫の泣き笑いの暮しを想像する。地域の消えゆく光景を一句にとどめておく大切さ。

以上の他に雪嶺集・前山集推薦候補作を掲げる。

翻車魚を探しに行くよ夏休み 唐澤南海子
秋風や持仏に紐の通し孔 野口美智子
簾を繋ぐ棕櫚縄を繰ふ晩夏光 吉川 教子

恐竜の眠る地層への想像とはスケールが大きい

恐竜の眠る地層へ蟬の穴 田中 優子

恐竜といっても掌に乗るくらいの小きなものもあるという。栄えたのは中生代のジュラ紀・白亜紀。一億四五〇万年前

から六五〇〇万年前。蟬のような昆虫はもっと前、古生代。三億六〇〇〇万年前には出現していたという。掲句は現代の蟬。その穴が恐竜の化石の地層だというのがおもしろい。蟬の幼虫もどこか恐竜と似ていないか。若いおかあさんが子どもに恐竜の本を見て、興味を抱いたものか。想像が拡がる。

身にしみて火星キラキラ竹シャンシャン 職 達久

地球のすぐ外にある火星を観測したものか。火星には地球に似た四季があるという。表面は赤褐色に暗緑色が混るとか。「キラキラ」と「シャンシャン」とを対比し、調子がいい。天体観測に疲れて、ふと竹林のそよぎのいきいきしているさまに目を留めたものか。十八歳の高校生の自在さがうらやましい。ことばへの音感がいい。換音は意味以上に想像を拡げる。

嗽葉くちびる乾く夜学かな 飯田 六斗

苦学生の境涯を思わせ、生活臭がぐっと頭つ一句。しきりに嗽葉使う、神経質な夜学生。戦中戦後のイメージ。夜学生の演技が身についた木村功という俳優がいた。懐かしい。

刈りたての草に寄るなり山の鳥 田中 弘泰

なおにひかれたものか、さりげないが、山の鳥の習性であろう。こんな淡さが俳句では掬い上げられる。

猿尾枷消したき記憶振り払ひ 古畑富美江

切岸に道がつく棧の親不知。地から蟬の声が湧き上る地貌のふしぎを捉え巧み。「揚がる」がいい。

どんばすや田舟曳き摺る仕事唄 長谷川みきこ

「どんばす」は北限の鬼蓮の意。語感の重々しさに手応えがある。蓮根掘りのきびしさが唄の助けを借りて保たれている。労働詠に格調がある。

秋の鮎千曲川よりひっこ抜く 那須野次則

「ひっこ抜く」の強引さがいかにも地の表現の迫力満点。小諸句会の長老。熱心この上ない。人間に貫禄がある。

手の平を窓のむこうの虫に当て 堀内 昭代

今月の秀句

十代の心の霧やカプチーノ 島形英美子

四十代の作者。十代の頃のもやもやとした思いを「心の霧」と捉えたものか。十代の主人公が居るとも受けとれるが、十代の少年少女の一般的な「心の霧」を云々してみてもおもしろみがない。こゝは回想句とみる。イタリアのコーヒーに泡立てた生クリームを加え、シナモン味を付けたカプチーノ。十代の夢多き故の迷いの心情がカプチーノだとはお洒落な言い切り方だ。身近にモデルがいるものか。好調な作者。

「猿麻栲」と書く。縦や落葉松にベールを掛けたように垂れさがる地衣類。短い涎掛状のものから長さ七メートルに達するものもあり、霧がかかる深山の樹木に揺れている。なにか嫌なことか失敗したことがあった後には、へあゝいやだいやだ」とこんな気持ちになる。臨場感がある。熱心な作者。

あの燕また来るからと言はざりき 若林 敏明

南への帰燕で春にまた戻るのはどれくらいか。燕より遠くへ行く鷹は三割という。七割が戻らないらしい。ことし軒に巣を作った燕が秋燕となり、家の前の電線などに留まり別れの表情をみせたものか。来春もとは言わなかったと回想したもの。どこか人くさい。作者が人懐っこいのか。

竹蜻蛉月の棚田へ放ちやる 村田 朋美

夕月の棚田を思い浮かべた。竹蜻蛉を仕上げたのが夕方、逢魔が刻に出来具合をためしたもののか。少年の日の回想と読んだ。月夜の棚田では怪異的。少年の一途さに目を留めた。

コスモスの雲押しわけて佐久はるか 中岡 草人

佐久高原のコスモス畑を遠い日に堪能したことがあったものか。いま目の前にもコスモスがある。その雲のかなたにある佐久。もう佐久へ赴くことも無理ではないかとの思い。地名佐久がいい。開墾された地の意とか。長老のご健勝を祈る。

親不知海より揚がる蟬のこゑ 幹 自聲

さみしさ、懐かしさ。虫の音をたずね、音楽の先生らしい。

木曾駅の落し物なる甲虫 宮坂 千恵

都会の子が駅へ忘れていったものか。甲虫の入った虫籠を描き、夏の終りを思わせる。信濃の短い夏。一抹の哀情。

ダリヤ咲く遠くより来し友の如 三原 蛙子

ダリヤ好きであろう。ダリヤには異国情緒がある。なでしこやおみなえしのような日本風の花とは違う。泰西名画を思わせる、かの地の女優のごとし。作者の晴曇変らない熱心さに敬意を表したい。

生盆や天の邪鬼こそわが心情 百瀬石涛子

「天の邪鬼」の性情があったからこそシベリア抑留を生き貫いたのであろう。異常時には正常なものはみんな死んでしまった。片意地なのがよかった。長寿を切に祈る。

岳集推薦候補作を掲げる。

心病む子あり引揚船の夏 芳川莞久子
茹で黍の籠に山盛り夏休み 太田 薫
柚子坊の豊かな腹に狼狽へし 市川美八子
手を打ちて空気鎮める虫の夜 大高ます美
反戦の地軸となれよ阿波をどり 松浦 礼子
干し蝗足を良く揃りいなご味噌 堀内 令子